

語りの文で用いられる単純未来形に関する考察

田 原 いずみ

〇、はじめに

本稿では、一般的な意味での未来を表さない、つまり話し手の現時点から見た時間的な後行性を表さないフランス語の単純未来の用法を主なテーマとして取り上げる。主に小説などのフィクションのテキストの語りの文において用いられる単純未来（本稿では「語りの未来」と呼ぶ）の特性、物語中で生み出す効果に注目する。

一では、まず単純未来の用法を概観したうえで、語りの未来に対する疑問提起をする。次に、二においては、小説などのフィクションのテキストで用いられる語りの未来そしてその典型的用法を定義したうえで、特に語りの視点に注目し、その特性を明らかにする。その際に、語りの未来と似通ったニュアンスを持つと考えられる絵画的半過去や語りの半過去と呼ばれる半過去の一用法、そして自由間接話法の中で用いられる条件法現在との相違点にも着目する。最後に、三において、同様の環境で用いられる場合でも、二での議論の中心である語りの未来の典型的用法には当て

語りの文で用いられる単純未来形に関する考察

はまらない単純未来の用法があることを指摘したい。

一、単純未来の諸用法

一般的な会話や文章などで私たちが出会う単純未来の発話の多くは、その名が示す通り、次の Grevisse & Goosse (2011) の引用にあるように、単純未来は発話時点より時間的に後に起こる出来事や状態を表す、という趣旨の説明でカバーできる。

“Le futur simple marque un fait à venir par rapport au moment de la parole.”

(Grevisse & Goosse 2011 : 1146)

これは、フランス語学習者のための文法などにおいても伝統的にされてきている説明である。また、異なる時制を説明するために発話時点 (speech point) 、出来事の時点 (event point) と共に基準点 (reference point) という時間に関する概念を導入した Reichenbach (1947) の論によると、単純未来は次のように表すことが出来る。



基準点とは、ある出来事や状態がそれを基準にして提示される重要な時点であり、右の図にあるように、単純未来の場合、基準点（R）は発話時点（S）と同時点に置かれ、そこから見て左側、つまり時間的に後に出来事時点（E）が置かれている。この基準点の概念は、特に1つだけではなく複数の連続した発話において提示される複数の出来事の時間的關係を明確に表すことを可能にするが、⁽¹⁾例えば、単純未来におかれた1つの発話だけを考慮に入れる場合、右の Grevisse & Goosse (2011) を代表とする伝統的な文法的説明と同じであると言える。

単純未来の発話が表示出来事の多くは、上で示した説明でカバーできるが、実際に発話の中で伝えられる未来の出来事・状態の性質は多様である。まず、次の(1)、(2)、(3)の例文を見てみよう。

- (1) L'année 1982 sera bissextile. (Martin 1981, 青木 一九九八：一一五による引用)
- (2) L'universaire de mon fils tombera sur un samedi l'année prochaine.
- (3) Les prochains Jeux olympiques se tiendra en 2016.

このような場合、話題になっている出来事が実現されることは決まっており、出来事が起こる時点を単純未来が発話時点より時間的に後に位置づけ、l'année 1982 や l'année prochaine, en 2016 などの副詞的表現がより詳細な時間的情報を与えている。青木（一九八九：一一五）は(1)の単純未来について、話者の主観性が介入する余地は全くないと述べている。しかし、上の Grevisse & Goosse (2011) の引用にある説明で完全に説明できる(1)、(2)、(3)のような例は、単純未来の用法においてはむしろ稀であり、実際には「未来」という期間が発話時点において未だ生

語りの文で用いられる単純未来形に関する考察

起していない出来事・状態を含むことから、これまで多くの先行研究が指摘しているように、実現が確定している出来事・状態が表されることよりも、未来において起こる可能性のある出来事や状態が発話者の予測、予想などモダリティーの表現として用いられることの方がはるかに多い。

(4) Je te *rendrai* ton stylo tout de suite.

(5) Tu ne *sortiras* pas ce soir.

(6) Entre samedi soir et dimanche, une perturbation peu active *lechera* le nord de la Suisse et *donnera* quelques gouttes au nord des Alpes.
(www.meteosuisse.com, 30.08.2013)

(7) On sonne à la porte. Ce *sera* le facteur.
(Stioul 1998 : 206)

(4) は発話者から聞き手への約束、(5) は発話者から聞き手への禁止のニュアンスがまだ実現していない未来に起こりうる出来事に対して単純未来によって生み出されており、そこに発話者の主観性が表れている。また、(6) は翌日と翌々日の天気に関する天気予報からの例であるが、天気予報においても単純未来は頻繁に用いられることが観察される。現在の天気予報は当たる確立はかなり高いが、それでもまだ現実のものにはなっていない気象状況は、確定した事実ではなくあくまでも「なるだろう」というモダリティー性を含む予報の形で提示されることから、単純未来が用いられるのだろう。(7) はこれまでかなりの数の単純未来に関する先行研究 (cf. Rocci, A. 2000, Morency, P. & Sassure, L. de. 2006, Morency, P. 2010) で中心的な問題として扱われてきたタイプの例である。これは、玄関の

ベルが鳴った時に家の中いる人が発する発話であるので、この発話で描かれている状態は未来ではなく現在に関わることである（ベルを押した人は現在玄関ドアの向こう側にいるという状態）。この例について Morency (2010 : 198) は次のように述べている。

“On l'explique comme un usage modalisé qui permet d'exprimer une proposition que le locuteur juge probable.” (Morency 2010 : 198)

この例においては単純未来のモード的な性質が強調されており、時制というより発話者の主観性を強く表現するモダリティーの表現と捉え得ると考える。

単純未来の特性について頻繁に議論に上がるのは (4) から (7) に見られるようなモード的な性質であり、他の直説法の時制に比べてこの性質が強いことから、未来形は時制なのかモダリティー表現なのかという疑問が頻繁に提起されてきた。しかしながら、単純未来の用法で、従来伝統的にされてきた文法書などでの説明からは大きく外れる用法はそれだけではない。(4) から (7) に見られるような単純未来の用法に関しては、そのモード的な性質は説明しきれではないが、発話によって表されている出来事の生起時点と発話時点の関係は伝統的にされてきた説明の通り、発話時点は出来事の生起時点に先行する（可能性がある）と捉えることが出来る。それ以外に、次の (8) に見られるように、全ての単純未来の用法に共通であるように思われるこの特性に当てはまらない用法がある。

語りの文で用いられる単純未来形に関する考察

(8) L'empereur pleure de la souffrance

D'avoir perdu ses preux (...)

et surtout de songer, lui, vainqueur des Espagnes

Qu'on fera des chansons dans toutes ce montagnes

(Hugo, *Légende des siècles, La fin de Satan, Dieu*, cité par Grevisse & Goosse 2011 : 1147)

(9) Son œuvre aura peu d'échos et il ne vendra qu'une seule toile de son vivant.

(*Grand Larousse encyclopédique, Van Gogh*, cité par Grevisse & Goosse 2011 : 114)

この用法は主に小説などの語りの文や歴史的叙述などにおいて用いられる。Grevisse & Goosse (2011) は (8) (9) の例を挙げ、この用法を単純未来の特殊な用法の一つとして次のように説明している。

“Dans les exposés historiques, on peut employer le futur simple pour énoncer un fait futur par rapport aux événements passés que l'on vient de raconter (notamment quand ceux-ci sont exprimés par le présent historique)”

(Grevisse & Goosse 2011 : 1147)

(8) は単純過去をベースに語られるフィクションのテキストであるが、この例文の最初の発話では過去またはフィ

クシヨンの世界の中のある時点を表すことの出来る、歴史的現在 (présent historique) (または、語りの現在、(présent narratif)⁽²⁾) が用いられており、それを基準として、その後起こることが単純未来におかれている。(9)は、ゴッホの没後に書かれた文章であるので、本来ならば発話時点から見た過去を表す過去時制で書かれるのが普通であるはずのところ、単純未来が用いられている。このような用法は、他の単純未来の用法に共通の性質と正反対で、発話時点から見た過去を表すという意味では非常に特殊な用法であるが、実際には特に小説などにおいて用いられる珍しい用法であり、Grevise & Goosse (2011) が述べているように、歴史的現在 (présent historique) と密接な関係を持って現れることが多いので、*“futur historique”* と呼ばれることもある。なお、この直説法現在の用法に関しては、本稿では小説の語りの文に現れる例を主に扱ってゆくことから、以降では「語りの現在」という呼び方を採用する。

次の二以降で、発話時点から見て時間的に後に起こる可能性のある出来事や状態を表すと解釈されないこの用法を議論の中心に置き、その特性について考えてゆく。なお、本稿では、主に小説を代表とするフィクションのテキストの語りの文に現れる単純未来の用法に注目してゆくことから、以降この用法を「語りの未来」と呼ぶ。

二、発話時点から見た未来を表さない用法

二では、一の終わりで導入した「語りの未来」についてより詳細な考察をしてゆく。まず、二一において、語りの未来が一般的にどのように用いられ、解釈されるかについて述べてゆく。そして、二二においては、その語りの未来の典型的な用法の特性を、絵画的半過去や自由間接話法において用いられる条件法現在との相違点を考慮に入れ、

特に文脈中で生み出す効果という点に着目して論じてゆく。

二一 語りの未来の典型的用法

原則として単純過去を中心とする過去時制をベースにして語りの文が構成されているフィクションのテキストにおいて、単純未来の最も典型的な用法は、一で挙げた引用部分で Grevisse & Goosse (2011 : 1147) が述べているように、文脈で他の発話によって導入された過去のある時点から見た未来を表す用法である。この用法にあたる例文を次に挙げる。

- (10) A partir de mars 1932, mon père et ma mère quittent la résidence de Forestry House et s'installent dans la montagne, à Banso, où un hôpital doit être créé. Banso est au bout de la route de latérite carrossable en toutes saisons. C'est au seuil du pays qu'on dit « sauvages », le dernier poste où s'exerce l'autorité britannique. Mon père *sera* le seul médecin, et le seul Européen, ce qui n'est pas pour lui déplaire.

(Le Clézio, *L'Africain* : 67)

- (11) Pendant sept ans il étudie à Londres, d'abord dans une école d'ingénieur, puis à la faculté de médecine. Sa famille est ruinée, et il ne peut compter que sur la bourse du gouvernement. Il ne peut pas se permettre déchoquer. Il fait une spécialité de médecine tropicale. Il sait déjà qu'il *n'aura* pas les moyens de s'installer

(10) と (11) は *Le Clézio の L'Africain* からの引用であり、この本では、第二次世界大戦中、アフリカに旅立ち、アフリカに生涯を捧げた医師であった父の半生記が作者（一人称で小説の語り手）によって語られている。フランス語の小説の多くが単純過去をベースに書かれているが、この物語は複合過去をベースに語りの文が書かれている。これは、これが架空の世界や出来事を語るフィクションではなく、作者自身の幼少時代や父親に関する記憶などをもとにした物語だからであると考ええる。(10) では、まず一つ目と二つ目の発話において、作者の誕生前の一九三二年に、両親がカメルーンの Bauso に引っ越した頃の出来事が語りの現在で語られている。そして、最後の発話 (*Mon père sera le seul médecin...*) では、その前の文脈で語りの現在によって指示されている過去の時点を基準点として、時間的に後に位置する状態が単純未来で書かれている。ここでの単純未来は、作者の発話時点（執筆時点）から見れば過去にあたるある時点を指示する語りの未来である。また、(11) は、父親が学生だった頃のことに関する部分であり、地の文では語り手である作者の発話時点から見た過去の出来事が語りの現在で描かれている。引用部分の最後の発話 (*Il sait déjà qu'il n'aura pas les moyens de s'installer comme médecin privé*) では、主節の語りの現在が指示する時点が基準点となり、従属節では主節が指示するその時点より未来に位置するであろうことが単純未来で指示されている。この例のように、語りの現在を主節に持つ発話の従属節で用いられる単純未来も一種の語りの未来の用法として認めることができるであろう。Shioui (1998) が次のように述べている通り、本稿で語りの未来と呼ぶ単純未来の用法は過去のある時点から見た未来を表しており、その中の多くは (10)、(11) にあるように

語りの文で用いられる単純未来形に関する考察

語りの文で用いられる単純未来形に関する考察

語りの現在によって指示された過去（またはフィクションの世界）のある時点をその基準点としている。

“Le futur historique rend compte d'un événement antérieur au moment de l'énonciation, mais appréhendé comme futur à partir d'un moment du passé.”
(Stioliou 1998 : 206)

この引用にあるように、語りの未来は通常、過去のある時点から見た未来を表す⁴と説明されるが、その基準点となり得る時点に関しては語りの現在によって導入された過去のある時点ではなく、次の例にあるように、文脈で他の過去時制におかれた発話によって導入された時点である場合もある。

- (12) Déjà en 1929, Paul Morand notait dans son vif essai Hiver caraïbe que tout finissait en Haïti par un recueil de poèmes. Plus tard Malraux *parlerait*, lors de son dernier voyage à Port-au-Prince en 1975 d'un peuple qui peint.
(Laferrrière, *Tout bouge autour de moi* : 13)

(12) の最初の発話で用いられている半過去は、絵画的半過去 (*imparfait pittoresque*) や語りの半過去 (*imparfait narratif*) と呼ばれる用法であると考える。絵画的半過去は、過去において展開中の出来事を表す過去時制としての通常の半過去の用法に反して、過去において完了した出来事を表し、その出来事が目の前で展開しているかのような生き生きとした印象を与えると説明される豊かな文体的効果を持つ用法である。単純過去や複合過去との違いは主に

その文体的な効果にあると考えるが、⁽³⁾半過去の典型的な用法と異なり、単純過去、複合過去と同様にそれ自体が基準点を導入することが出来る。この例においては、最初の発話が文脈中に導入する基準点から見た未来、つまり時間的に後に起こることになった出来事を語りの未来が用いられている二つ目の発話が表している。一般的に単純未来が現在ではなく、過去時制が導入する時点から見た未来、つまり「過去未来」を表すということは理解しがたいが、語りの未来の用法の場合、次の朝倉(二〇〇二)が挙げている引用も示すように、珍しいことではない。

「GIRAUD は Rousseau の *ルビ* を単過 (= 単純過去) と述べた後に *A l'aube du siècle, Chateaubriand viendra* « ressuscié l'âme »... 「世紀の黎明に Ch (= Chateaubriand) が現れて、魂をよみがえらせる、であろう…」と続ける。」
(朝倉、二〇〇二:二二七、括弧内は筆者による)

以上で見たように、語りの未来は通常「過去から見た未来の出来事」を表す用法であると言える。さらに、語りの未来の最も一般的な用いられ方は、語りの現在が指示する過去やフィクションの世界の中のある時点から見た未来を表す用法である。同じ文脈中にある直説法現在と単純未来の間に元々ある時間的關係(現在が導入した基準点の後にある時点で単純未来が出来事時点を導入する)を考えれば、過去の出来事を表す語りの現在に対する未来を語りの未来が表すのは自然なことと考えられる。しかし、(12)や朝倉(二〇〇二:二二七)の引用が示すように、語りの未来は単純過去や絵画的半過去が導入する基準点から見た未来を表現することもあることから、語りの未来の用法は、現在と単純未来の間にある時間的關係が過去に移行したものではないことは明らかである。二二二では語りの未来

語りの文で用いられる単純未来形に関する考察

の典型的用法の特性についてより詳細に考察してゆく。

二二 語りの未来の典型的用法の特性

二一で見た通り、語りの未来は「過去のある時点から見た未来」を表す用法で、単純未来の一般的な用法、つまり「発話者にとつての現在から見た未来」を表す用法からはかけ離れており、文法書などにおいては一般的な用いられる用法の特性が過去に移動した形の単純未来の特殊な用法として扱われている。しかし、単純未来が現に語りの未来の用法を持つということは、その用法も単純未来の特性から由来したものであり、つまり、単純未来という時制は従来考えられてきたよりも柔軟な特性をもつ時制であると考えられるのではないだろうか。また、フランス語においては過去のある時点から見た未来を表す方法としては条件法現在を用いたり、近接未来 *aller* + 動詞の不定詞⁶を用いたりして用いたりする方法があるが、発話者がそれらではなくわざわざ語りの未来を用いる場合があることを考えると、語りの未来には独自の効果があると考えることが出来る。二二では、語りの未来の典型的用法をより詳しく分析し、その特性を明らかにしてゆく。

Stihoul (1998) は、単純未来は基本的に「E>P」(E = 出来事時点)はP (= 文脈により発話時点) (S) や他の時点に相当する時点⁷の時間的に後に位置する⁸を示すとしている。そして、語りの未来(↓(12))や *futur putatif* (見なしの未来) (↓(13))と呼ばれる一見特殊な用法も含めた単純未来の発話の解釈の際、次のようなプロセスを経て、PとEの価値を決定し、解釈に至ると述べている。

(12) Dix jours plus tard, Napoléon *sera* sacré Empereur.

(Sthioul 1998 : 206)

(13) On a sonné. Ce *sera* le facteur.

(Sthioul 1998 : 206)

Soit un énoncé au futur dénotant un procès E.

E est postérieur à P.

Si P est identifiable à S, alors :

L'énoncé rend compte d'un événement E à venir (usage descriptif).

Simon récupérer dans le contexte ou par inférence un moment de conscience S'.

L'énoncé rend compte d'une pensée / d'une sensation E' postérieur à S' (usage interprétatif).

(Sthioul 1998 : 206)

この文では、語りの未来の場合、受け手（読者や対話相手）は文脈からPがSに相当しないことを判断し、Simon récupérer dans le contexte ou par inférence un moment de conscience S' という指示に従い、推論によって、発話者がより時間的に位置する“une sensation E'”を伝達しているという解釈に至ると考えられている。Sthioul (1998) は、語りの未来の場合にS'がどの意識主体の意識に結びついた時点であるかは述べていない。本稿では、Sthioul (1998) がここで述べているように、語りの未来の大きな特性の一つとして、ある意識主体の視点から見た未来が表されている

語りの文で用いられる単純未来形に関する考察

ることがあるのではないかと考える。一般的な単純未来の用法においては、一で見たように、単に発話時点から見た実現がすでに確定している未来の出来事よりも、発話者の推測、禁止、約束などといったモダリティを表すことが普通である。そこから、単純未来は元來発話者の視点、意識とは切っても切れない関係性を持つということが出来る。ただし、語りの未来の場合は発話時点から見た未来を表すわけではないので、発話時点にいる発話者の視点、意識と直接結びついているとは考えにくい。また、過去やフィクションの出来事が過去時制をベースに語られているテキストにおいて、他の時制ではなく語りの未来を用いる場面においては、それに結びついた発話者（作者）の意図があるはずである。それは、発話者が用いられる文脈において、語りの未来が独特の効果を生み、それによって受け手（読者）がテキストの語りに何らかの印象を持つことを発話者が意図することだと考える。Barceló & Bres (2006) は、Shioul (1998) に反し、常に発話時点から見た未来を表すということが単純未来の特性であると主張している。その中で、語りの未来の用法において文脈中の「過去」(「+ passé」du contexte)と単純未来の示す「未来」(「+ futur」du FS (= futur simple))が矛盾を起す点については次のように述べている。

“On peut dire que cette contradiction se résout par un allègement de l’instruction temporelle du FS, qui ne signifierait plus que la postériorité par rapport à un moment du passé. On rendra compte de la discordance de l’interaction par la production de l’effet de sens de piquant : le locuteur transporte fictivement le moment du passé dans le *mmc*, d’où il peut considérer l’événement comme futur.”

Barceló & Bres (2006) は、単純未来は常に発話時点から見た未来を表すと主張しているものの、語りの未来の用法の場合、その性質がなくなり、その代わりに“*effet de piquant*” (刺激的な効果) が生み出されるとしている。そして、発話者が過去の時点を *nume*、現在⁶ に移行させることにより、そこから出来事を未来のものとしてしていると主張する。Barceló & Bres (2006) の説では、発話者が過去の時点を、現在⁶ に移行させることによりどのようなプロセスを経て *effet de piquant* が生み出されるのかが明らかにされていないが、語りの未来によって、単純過去や複合過去の発話では生み出せない生き生きとした、好奇心を刺激するような効果が生み出されるということには同意する。本稿では、語りの未来独特の効果は発話者 (語り手) の視点が移動し、それを通して受け手 (読者) が過去やフィクションの世界における未来を過去の世界またはフィクションの世界の内部から捉え得ることに由来すると考える。以下において、語りの視点の移動から説明されることの多い絵画的半過去や自由間接話法中で表されている意識主体の意識の存在する時点 (*moment de conscience*) から見た未来を示す条件法現在との違いに着目することにより、語りの未来の典型的用法が生み出す効果、ニュアンスについてさらに考察してゆこう。

- (14) Apparemment Marguerite de Baraglioul redoute l'influence de son beau-frère et se soucie peu de laisser longtemps sa fille avec lui. C'est ce qu'il *osera* lui dire, à demi-voix, un peu plus tard, tandis que la famille se rend à table. Mais Marguerite *lèvera* sur Anthime un œil encore légèrement enflammé.

— Peur de vous? Mais, cher ami, Julie aurait converti douze de vos pareils avant que vos moqueries aient pu remporter le plus petit succès sur son âme.

(Gide, *Les Caves du Vatican*)

語りの文で用いられる単純未来形に関する考察

この小説の語りの文は、多くのフィクションのテクストがそうであるように、単純過去をベースにして書かれている。(14) は、語りの現在が単純過去や半過去に取って代わり、単純未来に置かれた動詞 *osera* と *lèvera* はその語りの現在が指示する時点を基準点として解釈される語りの未来の典型的な用法である。右の Barceló & Bres (2006) の引用にもあるように、この例での語りの現在とそれをベースにした語りの未来は、単純過去をベースに書かれた場合に比べて、読者をより物語世界の場面に引きつけ、生き生きと感じさせる効果をあげていると考える。語りの現在や語りの未来が用いられる場合、語り手は、物語世界と切り離され客観的に物語を語るという立場を一旦離れ、物語世界に自身の視点を移しており、その視点に寄り添うことによって読者はより近く物語世界を感じることができるとはならないだろうか。物語世界での出来事を、それがあたかも目の前で出来事が展開されているように生き生きと描き、読者の好奇心を刺激する効果をあげると説明されることの多い時制に絵画的半過去や語りの半過去と呼ばれる過去時制としての半過去の一用法があるが、語りの現在や語りの未来が読者に与える効果と絵画的半過去の効果は同等のものであると考えてよいのだろうか。Tahara (2004) では (15) のような典型的な絵画的半過去の用法の生み出す効果と解釈の際に表される視点について次のような考えを述べた。

- (15) À quinze ans, enfin, on la maria. Deux ans plus tard, son mari mourrait poitrine. Elle l'avait épuisé. Un autre en dix-huit mois eut même sort. Le troisième résista trois ans, puis la quitta. Il était temps.

(Maupassant, G.de, "L'enfant", *Contes et nouvelles* : 982)

“(…) l'imparfait narratif amène le lecteur à inférer que l'énoncé doit être interprété à partir du point de vue d'un témoin considéré comme assistant à une scène sans participer au déroulement de l'histoire. Le témoin, pour ainsi dire, est un spectateur qui demeure à l'intérieur de la scène de l'univers raconté en témoignant des éventualités qui se déroulent sous ses yeux. (…) En recourant au point de vue d'un témoin pour l'interprétation d'un énoncé de fiction à l'imparfait narratif et en s'y identifiant, le destinataire peut se situer à l'intérieur de l'univers raconté. Ainsi, il est en mesure de s'approcher de cet univers du récit en adoptant le point de vue d'un témoin fourni par l'imparfait narratif. De là, nous pouvons expliquer l'impression que donne l'imparfait narratif au destinataire, à savoir voir les éventualités du monde du récit se dérouler sous ses yeux, autrement dit, comme s'il assistait à la scène.”

(Tahara 2004 : 154-155)

一方、語りの現在に結びついている語りの視点については田原(二〇一三)で次のように述べた。

「語りの現在に結びついた視点は語り手の視点である。通常は物語世界の外から淡々と語りの行為を遂行する語り手が、語りの現在の発話の場合には語られている世界にその視点を移動させ、そのことにより語りは実況中継をしているかのように生き生きとした印象を与えるものとなる。読者はこのような語りを通して物語世界で展開中の出来事を通常より臨場感を持って感じるようになるのである。」(田原 二〇一三：七〇-七二)

以上のように、本稿では、絵画的半過去と語りの現在および語りの未来の間には、語りの視点の移動という共通点は考えられるものの、それを通して発話が解釈される視点の持ち主が異なるという本質的な相違点があると考ええる。絵画的半過去の場合、発話者が表す出来事や状況は、物語世界の外から客観的に物語を語る語り手の視点を離れ、一時的に出来事が展開中の場面を直接目撃する架空の目撃者の視点から語られることにより、場面の続きに対する好奇心、想像力を刺激し、余韻を持たせて場面を描くと考えるが、語りの現在およびそれを基準に解釈される語りの未来の場合、語りの視点は語り手に留まると考える。これは、直説法現在と未来の常に発話者の現在時点を基準に解釈されるという基本的な特性から外れていない。もちろん、語りの現在は発話者（作者、または作者から語りを任された語り手）の発話時点と同時の出来事を表すとは解釈されず、ここでは語り手の視点が実際に出来事の起こった過去またはフィクションの世界のある時点に移動し、そこを基準点のある「架空の現時点」とすると考える。このことにより、読者は移動した語り手の視点を通して、物語や過去の世界を客観的に遠くから眺めるのではなく、臨場感を持って今起こっている出来事を見るような印象を持つことができる。また、語りの未来の典型的用法はこの視点から見た未来として解釈される。読者に与えるこの印象・効果を考えると、確かに絵画的半過去と似通ったものであると言えるが、架空の目撃者ではなく語り手自身の視点が移動していると考えることによって、次の例にあるような語りの未来の典型的用法を持つことの多いニュアンスが説明できる。

- (16) À côté de ce qui attend mon père en Afrique, les expéditions pour remonter les fleuves de Guyane ont pu lui sembler des promenades. Dans l'Ouest africain, il va rester vingt-deux ans, jusqu'à la limite de ses forces.

Ici, il *comaitra* tout, depuis l'enthousiasme du commencement, la découverte des grands fleuves, le Niger, le Benoue, jusqu'aux hautes terres du Cameroun. Il *partagera* l'amour et l'aventure avec sa femme, à cheval sur les sentiers de montagne. (Le Clezio, *L'Africain* : 45)

(16) では、2つ目の発話 (*Dans l'Ouest africain, il va rester vingt-deux ans, jusqu'à la limite de ses forces.*) に近接未来が用いられている。近接未来と単純未来の相違については本稿では議論に挙げないが、発話時点がある語りの現在と密接な結びつきがあるとされる近接未来がこの文脈で用いられているのは非常に興味深い。近接未来は本来発話時点から時間的に近いとみなされる未来の時点を示すが、(16)の文脈を考えると、語り手である作者の発話時点、すなわち作者が執筆している時点からみた未来を示していないことは明らかである。ここでは、作者の父親がアフリカ西部に渡ろうとしている時期を指示する語りの現在、つまり過去の出来事を精彩を持って描く文体的効果を持つ現在形の用法が想定されており、その時期からすぐ後に始まることになったアフリカ西部での父親の二二年間の暮らしが近接未来であたかもこれから始まる未知のことのように予告されている。そして、その次の文からは、単純未来が用いられているが、これらの発話も二つ目の近接未来の発話同様、暗に想定された語りの現在の時点が解釈の基準点になっていると考える。これらの発話によって書かれている出来事は、実際には作者の発話時点(執筆時点)から見れば過去の出来事であり、自分の父親が実際に体験したことを描いているが、それを過去の出来事に関する淡々とした報告としてではなく、この引用部分の後に続く物語へ展開の余地を与え、読者の期待感や好奇心を刺激する語りの未来で導入している。そこにはすでに過去の出来事の展開を知っている作者による予告のニュアンスがあ

語りの文で用いられる単純未来形に関する考察

ると考える。また、この例では、三つ目の発話 (*Tci, il comantra tout, depuis l'enthousiasme du commencement, ...*) において、空間の直示表現である *ci* が用いられている点も興味深い。作者が執筆時点で居た場所から見れば、アフリカ西部は *là* や *dans ce pays* の様な表現で指示されるのが妥当であるように思われるが、ここで敢えて *ici* を用いることには、読者の意識を父親が半生を過ごしたことになるアフリカの西部に近寄せ、語りの未来の持つ文体的効果との相乗効果をあげるという作者の意図があると考ええる。この例にあるように、語りの未来は過去やフィクションの世界におけるある時点からみた未来に起こる出来事の展開を推測する立場の架空の視点ではなく、すでに過去の出来事の展開を知っている、または物語の全貌を知っていると想定される、全知の語り手 (*narrateur omniscient*) の視点を通して解釈されるため、予告というニュアンスが生まれる。この語りの未来が生む効果は朝倉 (二〇〇二) の次の引用に端的に表れている。

「単未 (＝単純未来) は語り手が事実として確認していることを述べるもので、単に予想された事実を述べる条
現 (＝条件法現在) とは異なる。」 (朝倉 二〇〇二: 二二七-二二八、括弧内は筆者)

絵画的半過去の場合、過去や物語世界で展開中の出来事を舞台となる場面の内側から眺める架空の視点に寄り添う受け手 (読者) は、これから何が続いて起こるのか分からない、という立場に身を置くことから、好奇心、期待、焦燥感など場面内にいるかのような印象を受けると考えられるが、それに反して語りの未来に関しては、朝倉 (二〇〇二) の右の引用にあるように、過去や物語世界から見た未来に起こるであろう出来事は語り手によって実現

されるものとして提示される。従って、語りの未来によって与えられる効果は、絵画的半過去の場合の好奇心や期待と似てはいるが、それは未知の出来事に対するものではなく、語り手よって予告された未来に起こる出来事に思いを馳せる際に生み出される印象であると考ええる。

次に、物語のある場面に位置するある意識主体の視点から見た未来を表すという点で語りの未来と共通点を持つと考えられる自由間接話法中で用いられる条件法現在との相違点に着目してゆこう。自由間接話法で最も頻繁に用いられる時制は半過去である。この場合、半過去は発話時点からみた過去を表わすのではなく、過去やフィクションの物語の登場人物にとっての「現在」と同時の時点を示し、一般の半過去におかれた発話には用いられ得ない *maintenant* や *ici* のような直示表現、また間接話法には現れない疑問文や感嘆文が用いられ得る。自由間接話法の発話者はその人物の発言や思考を表わすと解釈される。条件法現在は、次の例にあるように、自由間接話法の発話の中で、半過去で表された登場人物にとっての「現時点」にあるその人物の視点から見た未来を表わすのに用いられる。

- (17) *Ce jour-là le facteur Boniface, en sortant de la maison de poste, constata que sa tournée serait moins longue que de coutume, et il en ressentit une joie vive. Il était chargé de la campagne autour du bourg de Vireville, et, quand il revenait, le soir, de son long pas fatigué, il avait parfois plus de quarante kilomètres dans les jambes. Donc la distribution serait vite faite; il pourrait même flâner un peu en route et rentrer chez lui vers trois heures de relevée. Quelle chance!*

(Maupassant, *Gde. Contes du jour et de la nuit*, "Le crime au père Boniface": 13)

語りの文で用いられる単純未来形に関する考察

語りの文で用いられる単純未来形に関する考察

この例では、最後の二つの発話 (*Donc la distribution serait vite faite; il pourrait même flâner un peu en route et rentrer chez lui vers trois heures de relevée. Quelle chance!*) が登場人物 Boniface の思考を表わす自由間接話法の発話であると解釈される。この発話で用いられている条件法現在 (*serait, pourrait*) は Boniface のこれから起こるであろうことに関する推測を表している。この場合、語り手は一時的に姿を消し、語り手の語りを通さず直接登場人物の発言や思考が表されていると解釈されるので、そこで条件法現在で表された出来事は単に登場人物によって推測されたものであり、過去や物語世界から見た未来においてそれが実現されるかどうかには関係がないと言える。このように、語りの未来と自由間接話法で用いられる条件法現在は解釈の際に現れる視点が本質的に異なっているのである。条件法現在に関しては、朝倉 (二〇〇二) が右の引用で述べているように、自由間接話法とは解釈されない発話において発話者 (フィクションの場合は語り手) のある出来事の生起に関する推測を表す場合も考えられる。

- (18) L'accusé se rassit. Devant cette révélation, l'affaire a été reportée à la session suivante. Elle passera bientôt. Si nous étions jurés, que ferions-nous de ce parricide?

(Maupassant, *Contes du jour et de la nuit*, "Un parricide": 133)

(18) は短編小説の結末の部分からの引用である。この物語は、この引用部分までは語りの地の文は単純過去をへーに書かれているのだが、物語の締めの部分で複合過去 (*Devant cette révélation, l'affaire a été reportée à la session suivante.*) が用いられ、次の発話では単純未来 (*Elle passera bientôt.*)、そして最後の発話 (*Si nous étions jurés,*

que ferions-nous de ce parricide?) では条件法現在が用いられている。作者には、最後から三つ目の発話で単純過去ではなく複合過去を用いることにより、次回に持ち越された問題の殺人事件の裁判が読者にとってあたかも現実世界で起こったことのように感じさせる意図があるのではないだろうか。そして、次の単純未来の発話は物語世界から見た未来に実現されることになっている出来事(次回の裁判)を提示する語りの未来である。そして、最後の発話の条件法現在は条件文の従属節に用いられる用法であり、主節が提示する仮説に基づく推測を表す用法であるので、当然その実現が保証されていない単なる推測を表している。さらに、この発話は疑問文であること、そしてこの物語では最後の発話にのみ用いられる主語 *nous* によって、語り手が自分と読者を同じ立場に置き、物語の中心である殺人事件の裁判の行方を読者にも推測させ、好奇心を刺激する形で物語を締めている。また、この発話において条件法過去ではなく条件法現在が用いられていることも、この裁判が物語世界を読者から切り離された世界ではなく、まるで読者のいる世界で起こっているような印象を与えるためであると考ええる。この例で見取れるように、そして朝倉(二二〇〇二)が右の引用で的確に述べているように、語りの未来と条件法現在は、フィクションの世界または過去の世界から見た未来における出来事を表すことが出来るといふ共通点があるものの、その出来事が物語世界または過去において実現されたものであるかまたは単に推測されたものであるかという大きな相違点があると言える。

三、語りの未来のその他の用法

二では語りの未来の最も典型的な用法の特性を明らかにしたが、三では、フィクションのテキストにおいて用いら

れていても語りの未来の典型的用法には当てはまらない単純未来の用法があることを指摘したい。

本稿では小説の語りの文において用いられる語りの未来の例を挙げてきたが、語り手の立場がどのように設定されているかによって、語りの文で表される視点が誰のものであると解釈されるかは変わってくると考える。Le Clézio の *L'Africain* からの引用である (10)、(11)、(16) においては、筆者自身が一人称で語り手となっているが、大人になってからの、つまり執筆時点での筆者は回想である物語の中に現れることはなく、筆者自身やその両親のアフリカでの生活で起こったことを既に知っているという立場にあることから、いわば全知の語り手の立場にあると考える。そこから三では、この物語においては、語りの文中に現れる単純未来は筆者自身の執筆時点からみた未来に起こる可能性があると想定された出来事を表すのではなく、物語の舞台に視点を移した語り手としての筆者が物語世界から見た未来の出来事を表しているのだと述べた。しかし、次の例のように、語りの文で用いられた単純未来が、最も一般的な単純未来の用法の解釈、つまり発話者（ここでは小説の筆者に語りを託された語り手）が自分にとっての現在から見た未来の出来事を推測しているという解釈を受けることもある。

- (19) Je me *rappellerai* toujours cette jeune fille, qui passait sur les boulevards presque tous les jours à la même heure. Sa mère l'accompagnait sans cesse, aussi assidûment qu'une vraie mère eût accompagné sa vraie fille.
- (Dumas, *La dame aux camélias*)

- (20) Je revins à Paris où j'écrivis cette histoire telle qu'elle m'avait été racontée. Elle n'a qu'un mérite qui lui

sera peut-être contesté, celui d'être vraie.

(Dumas, *La dame aux camélias*)

『椿姫』の語り手は、物語の筋の中心には参加しないが、それを後に聞き、物語にしたという設定の登場人物であり、『私』として現れる。これらの例にあるように、この小説の中で、物語の中心となる過去の出来事を語る発話ではなく、語り手にとつての「現在」、つまり発話時点（執筆時点）を基準にして解釈される発話が時に現れる。このような発話は物語の筋になる出来事を客観的な視点から描くタイプの語り手の文とは区別される必要があるだろう。そして、そのような発話において用いられる単純未来は二で扱ったような語りの未来の典型例としての解釈は受けず、最も一般的な単純未来の解釈、つまり発話者の現時点から見た未来を表す解釈を受けるのである。

以上で見たように、小説などの語りの文の中に単純未来が用いられている場合でも、必ず二で論じたような語りの未来の典型的用法として解釈されるわけではなく、そのテキストの語り手の取る立場や、視点により発話者（つまり語り手自身）の現時点からみた未来を表すごく一般的な単純未来の解釈を受ける事が分かった。つまり、語りの未来としての単純未来の解釈は物語に対してどのような立場を取る語り手なのかという点に大きく依っていると言うことが出来るのである。

四、おわりに

フランス語の単純未来は、多くの場合、発話時点から見た未来のある時点に位置する出来事や状態を表し、文法書

語りの文で用いられる単純未来形に関する考察

などでもそのように説明されることが多い。しかし、実際の用いられ方を観察すると、この説明ではカバー出来ない用法もある。本稿では、その用法の中でも、主に過去時制で構成されたフィクションのテキストなどにおいて用いられる単純未来の用法を語りの未来と呼び、中心的な考察対象とした。

主に単純過去や半過去で構成されたテキストにおいて用いられる語りの未来は、先行研究でも指摘されているように、過去時制では生み出せない受け手（読者）の好奇心を刺激するような独特の効果を生み出すと考える。本稿では、語りの未来独特の効果は発話者（語り手）の視点が移動し、それを通して受け手（読者）が過去やフィクションの世界における未来の出来事を世界の内部から捉え得ることに由来すると考える。語りの未来は、過去やフィクションの世界における出来事や物語の続きや展開を既に知っている発話者や語り手によるその世界の未来に起こるべき出来事の予告のニュアンス持つことがあるが、これも語りの未来が登場人物などの架空の意識主体ではなく発話者（語り手）の視点から出来事が語られているからである。さらに、本稿では、語りの未来と一見同様の文脈効果を生み出す絵画的半過去と自由間接話法で用いられる条件法現在との本質的な相違点も発話の出处である意識主体が異なることに由来することを指摘した。

以上で議論の中心になった語りの未来は、*「発話時点は出来事の生起時点に先行する（可能性がある）」*と説明することが出来る単純未来の最も一般的な用法からはかけ離れた言わば特殊な用法として取り上げたが、語りの未来が過去やフィクションの世界の中に移動した発話者（作者）または発話者から語りを託された語り手の視点に結びついていくものであるとするなら、それは発話者の視点のある現時点から見た未来として解釈されるべきより一般的な他の用法と大きな共通点があると考えられる。つまり、語りの未来も他の用法も発話者の視点、すなわち主観性と密接に

結びついており、まさにこの性質が単純未来の本質の一部を成すと言えるのではないだろうか。

註

- (1) “The reference points about which Reichenbach speaks are established by context : often the relevance contextual factors are contained in the antecedent discourse, and these are the cases which we are concerned here.” (Kamp & Rohrer 1983 : 255)
- (2) 歴史的現在については、田原(二〇二二)を参照のこと。
- (3) 絵画的半過去(語りの半過去)についての考察については、Tabara (2004) の主に二章を参照のこと。
- (4) Le Bidois (1971) は絵画的半過去について次のように説明している：
“Ces imparfaits, ainsi employés, décrivent mieux, et surtout retiennent l'attention, excitent la curiosité du lecteur beaucoup plus que ne ferait un autre temps.” (Le Bidois, 1971 : 438-439)

参考文献

- 青木三郎 (一九九八) 「現代フランス語の単純未来形の「多変性」について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 三四、一一五-一二三頁
- 朝倉季雄 (二〇〇二) 木下光一(校閲) 『新フランス文法辞典』二〇〇二年、白水社
- Barcelona, G. J. & Bres, J. (2006). *Les temps de l'indicatif en français*. Paris : Ophrys.
- Grevisse, M. & Goosse, A. (2011). *Le bon usage*, 15^{ème} édition. Duculot.
- Kamp, H. & Rohrer, Ch. (1983), “Tense in text”, in Bauerle, R., Schwarze, C. & Von Stechow, A. (ed.), *Meaning, Use and Interpretation of Language*, Berlin : New York De Gruyter, 251-269.
- Le Bidois, G. (1971), *Syntaxe du français moderne*, Paris, Picard.

語りの文で用いられる単純未来形に関する考察

語りの文に用いられる単純未来形に関する考察

- Morency, P. & Sasseur, L. de (2006), "Remarques sur l'usage interprétatif épistémique du futur" in Saussure, L. de et Morency, P. (éds), *Temps, description et interprétation*, TRANEL 45 : 43-70
- Morency, P. (2010), "Enrichissement épistémique du futur", *Cahiers Chronos* 21 : 197-214.
- Reichenbach, H. (1947), *Element of Symbolic Logic*, New York, Free Press.
- Rocci, A. (2000), "l'interprétation épistémique du futur en italien et en français : une analyse procédurale", *Cahier de Linguistique Française* 22 : 241-274.
- Shioul, B. (1998), "Temps verbaux et point de vue" in Moeschler, J. & al., *Le temps des événements. Pragmatique de la révérence temporelle*, Paris, Kimé, 197-219.
- Tahara, Izumi (2004), *Usage descriptif et usage interprétatif des temps du passé et des adverbene temporels dans le discours de fiction*, 博士論文、シユネーヴ大学。
- 田原 イズミ (二〇一三) 語りの現在における考察、明學佛文論叢第四五号：五九―八三。

引用書

- Dumas, A., *La dame aux camélias*, iBooks.
- Gide, A., *Les Caves du Vatican*, iBooks
- Laferrière, D., *Tout bouge autour de moi*, Grasset, 2011.
- Le Clézio, J.-M. G., *L'Africain*, Mercure de France, 2004.
- Maupassant, G. de, "Un parricide", *Contes du jour et de la nuit*, Albin Michel, 1988.
- Maupassant, G. de, "L'enfant", *Contes et nouvelles*, Bibliothèque de la Pléiade, 1974.
- Maupassant, G. de, "Le crime au père Boniface", *Contes du jour et de la nuit*, Albin Michel, 1988.